

15-16世紀におけるジャズーリー教団研究に関する先行研究レビュー

棚橋 由賀里*

The Review of Previous Studies on Ṭarīqa Jazūliya in 15-16th Century

TANAHASHI Yukari

This paper examines previous studies on al-Ṭarīqa al-Jazūliya in the 15th and 16th centuries. Al-Ṭarīqa al-Jazūliya was founded by Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī, who called himself sharif and mahdī and gathered people to perform jihad against Portugal. Al-Ṭarīqa al-Jazūliya is considered to have been the trigger for the enlargement of Ṭarīqa in Morocco. Despite being an innovative person, the number of extant works and related previous literatures that al-Jazūlī worked on is limited. I would like to present the information necessary to expand research on Moroccan Sufism.

1. はじめに

本稿の目的は、15-17世紀に現在のモロッコで活動したジャズーリー教団 al-Ṭarīqa al-Jazūliya について、その成立初期から教義の完成を見る16世紀までに関する一次資料と先行研究を概観し、既存の研究の視座を把握するとともに、今後の研究の展望を示すことである。

1-1. ジャズーリー教団研究の意義

14世紀までのモロッコでは、カーディリー教団やリファーイー教団といった広域タリーカの組織的活動は見られず¹⁾、スーフィーの集団は国家よりもさらに狭い地域や地方の部族集団を基盤としたもの(ターイファ *tā'ifa*)に限られていた²⁾。その活動内容は主にズィクルやサマーウといった儀式・修行や学術研究であって³⁾、マリーン朝(668/1269-869/1465)や各地の総督への政治的要求は見られなかった。しかし15世紀にムハンマド・イブン・スライマーン・ジャズーリー(Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī 以下、ジャズーリー。?-869/1465)が登場し、シャリーフ(預言者ムハンマドの子孫)とマフディー(救世主)を自称したと言われる。彼はキリスト教勢力が攻勢を強める中で、神に導かれた指導者のもとでのイスラーム復興とジハードを主張して存命中から12000人以上の支持者を得、大西洋岸の町アスフィー(Asfi, 現在のサフィ)でポルトガル商人に対するジハードを試み、マリーン朝のスルタンを恐れさせたと言われている⁴⁾。ジャズーリー教団の規模・政治的影響力は14世紀までのスーフィー集団から大幅に拡大しており、モロッコにおいてはこれがタリーカの巨大化の契機と言える。ジャズーリー教団がどのようにして大衆化に成功したかを明らかにすることは、モロッコにおけるタリーカの巨大化のプロセスを解明することにもつながる。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) Vincent J. Cornell, *Realm of the Saint: Power and Authority in Moroccan Sufism*, Austin: University of Texas Press, 1998, p. 146.

2) 私市正年『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拜』山川出版社, 2009, pp. 267-268.

3) Ibn Qunfudh al-Qusanfīnī (d. ca. 1406); *Uns al-faqīr wa 'izz al-ḥaqīr*, Rabat: Faculté des Lettres Université Mohammed V, 1965, pp. 64-71.

4) Cornell, *Realm*, pp. 167-189.

1-2. 創始者ジャズーリーの生涯

以下に述べるジャズーリー教団の創始者ジャズーリーの生涯は、Vincent J. Cornellの著作⁵⁾が、現存するさまざまな伝記・伝承の記述を整理してまとめたものに基づいている。ただし、第3節の先行研究レビューで後述するが、これらの伝承は多分に後世の潤色を受けていると考えられる。

ジャズーリーはスース地方のシャリーフ家系に生まれ、若い頃に学問を志してマリーン朝の首都フェズへ行き、法学や法源学を修めた⁶⁾。修学を終えた842/1438年以降、ジャズーリーの伝記には7-14年の空白期間があり、①モロッコで修行のため隠遁していた、②ハッジに赴き、少なくとも7年間マディーナの預言者の墓の前で祈祷を行っていた、③カイロのアズハルモスクでアブドゥルアズィーズ・アジャミー(‘Abd al-‘Azīz al-Ajamī, 生没年不詳)というスーフィーに師事した、④モロッコのアブー・アブドゥッラー・アムガール・サギール(Abū ‘Abd Allāh Amghār al-Ṣaghīr, d. ca. 850/1446)というスーフィーに弟子入りし、サギールの没後ハッジへ行き、さらにカイロのアズハルモスクでアブドゥルアズィーズ・アジャミーに学んだ、などの説が存在する⁷⁾。

857/1453年以降、ジャズーリーがモロッコで活動していたことはどの伝記でも一致している。彼の教義とカリスマ的な人格によってその名はスーフィーたちの間で瞬く間に広まったという。フェズで1年間を過ごしたあと、弟子を連れて当時重要な港町であったアスフィーに移った。そこで13-14世紀モロッコの部族的ターイファの1つであったマージリーユーン(al-Mājirīyūn)のかつての拠点にザーウィヤを建設した。彼はイニシエーションにあたってマージリーユーンの儀礼(剃髪、杖と頭陀袋を身に付けること、40日間の断食など)を用いたと言われる。ジャズーリーは、マフディー(救世主)を自称し、神や預言者ムハンマドと会話した。ポルトガルが軍事的・商業的に攻勢を強める中で、彼は神に導かれたイマームの元でのイスラーム復興を主張した。その挑発的な言動はフェズのウラマーの反感を買ったが、ジャズーリーは知識を独占する偽善的なウラマーのせいで民衆が無知に陥り、キリスト教勢力の影響を受けて風紀が紊乱していると非難した。彼は貧困層や社会的弱者を中心として12000人以上の支持者を集め、アスフィーの商人やマリーン朝スルタンを恐れさせた⁸⁾。ジャズーリーはポルトガルとの交易による利権を手放したがる商人たちを非難し、ジハードを呼びかけていた。ジャズーリーの支持者の人口はアスフィーの半分になっており、脅威を感じた商人たちによってジャズーリーらは追放された。アスフィーを追放された後、ジャズーリーと側近たちは高アトラス地域の丘陵地帯ハーハー(Hāhā)に南下し、リバートを建設した。869/1465年、ジャズーリーは彼の影響力を恐れたマリーン朝によって毒殺されたと考えられている⁹⁾。

1-3. ジャズーリー教団について

ムハンマド・イブン・スライマーン・ジャズーリーを創始者とするモロッコのタリーカである。マリーン朝末期に登場し、ポルトガル勢力に対するジハードを行った。モロッコにおいては初の大衆的タリーカと言え、都市の貧困層・社会的弱者やアラブ系・ベルベル系遊牧民の支持を集めた。その儀礼には前項の通りモロッコの部族的ターイファのものが引き継がれている一方、ジャズーリーがエジプトで師事していたアブドゥルアズィーズ・アジャミーがシャーズィリー教団員だっ

5) Cornell, *Realm*.

6) Cornell, *Realm*, pp. 168-171.

7) Cornell, *Realm*, pp. 171-177.

8) Cornell, *Realm*, pp. 179-189.

9) Cornell, *Realm*, pp. 189-191.

たこと、ジャズーリー教団においてシャーヰイリー教団の創始者アブー・ハサン・シャーヰイリー (Abū al-Ḥasan al-Shādhilī, 593/1196–656/1258) の手による祈祷書を用いていることから、シャーヰイリー教団の分派とみなされることも多い。第2代シャイフ、アブドゥルアヰズ・タッバー (‘Abd al-‘Azīz al-Ṭabbā’, 以下、タッバー。d. 914/1508–9) はアル＝ジャズーリー死後の教団内の混乱を収め、880/1475年頃にマラケシュに初の都市ザーウィヤを建設し、自ら市井の人々に教えを説いた¹⁰⁾。また彼の時代に教団の影響範囲がフェズまで拡大した。第3代シャイフ、アブドゥッラー・ガズワーニー (‘Abd Allāh al-Ghazwānī, d. 935/1528–9) のときにサアド朝 (956/1549–1070/1659) に助力し、サアド朝興隆の要因となった¹¹⁾。サアド朝の繁栄にともなって16世紀にモロッコのみならずマグリブ地域や西アフリカにまで影響力をふるったが、サアド朝と衰退の運命をも共にした¹²⁾。しかし、ジャズーリーの教義の影響は現在まで残っており、ダルカーヴィー教団、ティジャーニー教団、ハマドゥシャ教団など北アフリカ・西アフリカにはジャズーリー系の教団が数多く存在している。

ジャズーリー教団の教義に関して、その修行論はジャズーリー自身によって作られた。それは、本節第2項で言及したイニシエーションののち、絶え間無くズィクルや預言者のための礼拝を行うこと、悪行の忌避、清貧といった14のステップを経て最終的な神との合一に至るというものである。個々のステップの目的には修行者自身が神へ接近することだけでなく、ムスリム共同体全体の調和や愛による団結といった社会的な側面もある¹³⁾。その一方で、ジャズーリー教団の政治的イデオロギーである「イマーム制の支配 (siyāda al-imāma)」と「ムハンマドの道 (al-ṭarīqa al-Muḥammadiya)」という概念 (第3節で詳述する) は、第3代シャイフであるアブドゥッラー・ガズワーニー (‘Abd Allāh al-Ghazwānī, 以下、ガズワーニー。d. 935/1528–9) によって完成された。

1-4. 本稿の構成

本稿では、まず第2節において史料の状況を確認する。続く第3節では、視野を広げて北アフリカにおけるスーフィズム研究史の流れを整理したのち、ジャズーリー教団の教義内容に触れながら先行研究を紹介し、それらの論点を整理する。第4節では第3節の内容を踏まえて今後の研究の展望を示す。

2. 史料

2-1. ジャズーリー教団シャイフの著作

筆者が二次文献と今夏のモロッコにおける調査をもとに存在を確認したものは17点である¹⁴⁾。調査したモロッコ国内の文書館はモロッコ王国国立図書館 (Bibliothèque Nationale du Royaume du Maroc, Rabat, 以下 BNRM)、カラウィーイーーン図書館 (Bibliothèque Qouaraouiynes, Fes, 以下 BQ)、王立図書館 (Bibliothèque Royale, Rabat, 以下 BR)、ベン・ユーセフ図書館 (Bibliothèque Ben Youssef, Marrakesh, 以下 BY) の4館である。また、下線を引いたものは筆者の調査で新たに

10) Cornell, *Realm*, pp. 234–235.

11) Vincent J. Cornell, “The ‘Sovereignty of the Imamate’ (Siyādat al-Imāma) of the Jazūliya-Ghazwāniya: A Sufi Alternative to sharifism?,” *Al-Qanṭara: Revista de Estudios Arabes*, 17 ii (1996), pp. 429–451.

12) Cornell, *Realm*, pp. xxxix–xl.

13) Cornell, *Realm*, pp. 181–182.

14) Cornell, *Realm* において言及されている8点に、*EP* の項目記載の *Ḥizb subḥān al-dā‘im la yazūl* を加えた9点を指す。

存在が明らかになったものであり、アスタリスクをつけたものはこの夏の調査で筆者が入手したものである。以下、ラテン文字転写時のアルファベット順にリスト化して提示する。

- Aḥzān al-Jazūlī al-Sahlī* (BNRM, 筆者未見)
Aḥzān wa awrād (BNRM, K1572, 筆者未見)
Ajwiba fī al-dīn wa al-dunyā (BNRM, Q731, 筆者未見)
* *'Aqīda fī al-tawḥīd* (Rabat, BNRM, K989)
* *'Aqīda al-walī al-ṣāliḥ Sīdī Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī* (BH ms. 7245)
Dalā'il al-khayrāt wa shawāriq al-anwār fī dhikr al-ṣalāt 'alā al-nabī al-mukhtār (al-Dār al-Bayḍā': Maṭba'a al-Najāh al-Jadīda, 1998 他刊本多数)
* *Ḥizb al-falāḥ* (BNRM, ms. D1060)
Ḥizb subḥān al-dā'im la yazūl (BNRM, 筆者未見)
Ḥizb al-Jazūlī ma'a al-ziyāda li-al-shaykh al-Sahlī wa tawassul li-Sīdī Aḥmad al-Ḥārithī (BNRM, 筆者未見)
* *Khiṣāl al-murīdīn* (BY, ms. 161)
* *Kitāb fī al-zuhd* (BNRM, K989)
Mukhtaṣar ummahāt al-wathā'iq (BNRM, Q871, 筆者未見)
Al-Nuṣḥ al-tāmm li-man qāla rabbī Allāh thumma istaqām (筆者未見、散逸し完全版なし¹⁵⁾)
* *al-Zuhd* (BY ms. 587/3)
Ta'līf fī al-tawḥīd (BQ ms. 723/7)
Risāla al-sa'y fī al-rujū' ilā allāh wa-faḍl dhikr lā ilāh illā Allāh (BNRM, D2797, 筆者未見)
Sharḥ 'alā qaṣīda fī al-malḥūn li-Mūsā ibn 'Alī (BNRM, D2589, 筆者未見)

このうち最も有名なものは *Dalā'il al-khayrāt wa shawāriq al-anwār fī dhikr al-ṣalāt 'alā al-nabī al-mukhtār* であろう。これは預言者ムハンマドを祝福するための祈祷書であり、祈祷、預言者ムハンマドへの祈祷の利益に関する記述、預言者の200の美名のリスト、マディーナにある預言者と教友、正統カリフのアブー・バクルとウマルの墓石についての記述から構成される。またこの連祷集は8つの祈祷(ヒズブ)に分かれており、月曜日から次の月曜日までの祈祷に割り当てられている¹⁶⁾。本書はマグリブにとどまらずサハラ以南アフリカやトルコ、レヴァント地方、さらにインドや東南アジアのスーフィーにまで広まり、現在も用いられている¹⁷⁾。*Ḥizb al-falāḥ* と *Ḥizb subḥān al-dā'im la yazūl* も少なくともモロッコにおいては今日も朗誦されている祈祷書である。前者はジャズーリー教団において毎日の朝と昼の祈祷に用いられていたとい¹⁸⁾、刊本の *Dalā'il al-khayrāt* に付録として収録されているケースも確認できる¹⁹⁾。後者はシャーズィリー教団の文

15) Cornell の *Realm* によれば、*Al-Nuṣḥ* は Ibn al-Muwaqqit の *Al-Sa'āda al-abadīya* (筆者未見) に一部が収録されている。その他の複数の写本集にも *Al-Nuṣḥ* の一部が収録されていると *Realm* に記されているが、現時点でそれ以上の詳細は不明である。

16) Hiba Abid, "Un nouveau souffie mystique: al-Djazuli et le *Dalā'il al-khayrat*," *Le Maroc medievale: un empire de l'Afrique à l'Espagne*, pp. 551–553, 2014.

17) Cornell, *Realm*, p. 157 も参照のこと。

18) Cornell, *Realm*, pp. 182–183.

19) Jazūlī, *Dalā'il al-khayrāt wa shawāriq al-anwār fī dhikr al-ṣalāt 'alā al-nabī al-mukhtār*, al-Dār al-Bayḍā': Maṭba'a al-Najāh al-Jadīda, 1998, p. 117.

書からも発見されたという²⁰⁾。

Al-Nuṣḥ al-tāmm li-man qāla rabbī Allāh thumma istaqāma はスーフイズムに関する論文である。この著作には、マシュリクの影響すなわちシャーズィリー教団とカーデイリー教団の影響が見られ、ジャズーリーがエジプトに滞在していたことの根拠とされている²¹⁾。

Dalā'il al-khayrāt と祈禱書以外のジャズーリーの著作は写本史料のみのため、現時点ではタイトルと二次資料からしかジャンルや内容をうかがうことができない。そのうち '*Aqīda al-walī al-ṣāliḥ Sīdī Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī*' には、大西洋岸のハーハー地方で当時起こっていた宗教的墮落の状況が記されているという²²⁾。その他、今夏入手した写本に関する筆者の見解は第4節で詳述する。

第2代シャイフ、タッバーの著作は現時点で確認されていない。ガズワーニーの *al-Nuqta al-azaliya fī sirr al-dhāt al-Muḥammadiya* にタッバー作とされる詩が収録されている²³⁾。

第3代シャイフ、ガズワーニーの著作は *al-Nuqta al-azaliya fī sirr al-dhāt al-Muḥammadiya* と *Tahbīr al-ajrās fī sirr al-anfās* の2作が確認されている。前者は聖者の本質に関する長大な論考であり、スーフイーとしての模範、イスラームのウンマ全体の指導者という2つの側面を、預言者ムハンマドの代理人という観点からイブン・アラビー (Ibn al-'Arabī, 1165–1240) の完全人間論と絡めて一貫した理論のもと論じている²⁴⁾。

2-2. 同時代史料と伝記史料

ジャズーリー、ガズワーニー及び成立初期のジャズーリー教団に関して言及しているアラビア語の同時代史料は少ない。特にジャズーリーについて記述がある同時代史料は皆無と言ってよい。法学とスーフイズムの融合を試みたモロッコのスーフイーであるアフマド・ザルーク (Aḥmad Zarrūq, 1442?–1493) の著作 *Al-Kunnāsh fī 'ilm āsh* においてジャズーリーの死亡直後のジャズーリー教団の混乱を批判する記述がある²⁵⁾。年代記に関しても、マリーン朝の滅亡については同時代に記されていない。エジプト出身の商人アブドゥルバースイト ('Abd al-Bāsīt b. Khalīl al-Ḥanafī, 1440–1514) が1462–7年にハフス朝、アブド・ワード朝、ナスル朝下の都市を訪れており、マリーン朝の滅亡に関する情報を記録しているが手稿本が断片的に伝わるのみであるという²⁶⁾。ヨーロッパ側の史料として、ポルトガルの年代記作家ゴメス・エアンネス・デ・アズラーラ (Gomes Eannes de Azurara, fl. 1448) による年代記がある²⁷⁾。ポルトガルによるモロッコ沿岸部の都市の侵略と、それに対するムスリム住民の抵抗の様子が記されている²⁸⁾。また、レオ・アフリカヌス (Leo Africanus, 1483–1455) の『アフリカ誌』第1巻に、16世紀初頭のモロッコ沿岸部の様子が詳細に記録されている²⁹⁾。

20) Mohammed Ben Cheneb, s. v. "al-DJAZŪLĪ," *EI*².

21) Cornell, *Realm*, pp. 177–178.

22) Cornell, "Mystical Doctrine and Political Action in Moroccan Sufism: The Role of the Exemplar in the Tariqa al-Jazūliya," *Al-Qanṭara: Revista de Estudios Árabes*, 13.1 (1992), pp. 201–231.

23) Cornell, *Realm*, p. 175.

24) Cornell, *Mystical Doctrine*.

25) Cornell, *Realm*, pp. 192–193.

26) 篠田知暁『ワッターズ朝期マグリブ・アクサーにおける国家と地域権力』京都大学文学研究科博士論文, 2015, p. 50.

27) 原書は散逸し、Bernard Miall による英訳版の *Conquests and Discoveries of Henry the Navigator: Being the Chronicles of Azurara*, London, 1600; repr. London: G. Allen & Unwin, 1936 が今に残る。

28) Cornell, *Realm*, p. 164.

29) Johannes Leo, *A Geographical Historie of Africa*, New York: Da Capo Press, 1969, pp. 80–86.

16世紀に書かれた人名辞典やマナーキブ(徳行伝)のうち、ジャズーリーに関する記述があるものは、アフマド・イブン・カーディー・ミクナーシー(Aḥmad ibn al-Qāḍī al-Miknāsī, 以下、ミクナーシー。d. 1025/1616)の *Durra al-hijāl fī asmā' al-Rijāl*、イブン・アスカル・ハサニー・シャフシャーワニー(Muḥammad Ibn 'Askar al-Ḥasanī al-Shafshāwanī, 以下、イブン・アスカル。d. 986/1578)の *Dawḥa al-nāshir li-maḥāsīn man kāna bi'l-Maghrib min mashāyikh al-qarn al-'āshir*、アフマド・バーバー・ティンブクティー(Aḥmad Bābā al-Timbuktī, 以下、アフマド・バーバー。d. 1036/1627)の *Nayl al-ibitihāj bi-taṭrīz al-Dībāj* である。このうちイブン・アスカルはガズワーニーの弟子アーイシャ・ピント・アフマド・イドリースィーヤ('Ā'isha bint Aḥmad al-Idrīsīya, d. 696/1563)の息子であり、*Dawḥa al-nāshir* にはガズワーニーの生涯や言動について詳細な記述がある³⁰⁾。

現在広く流布しているジャズーリーの生涯について、最も古い雛形と考えられるものはアラウィー朝(1644- 現在)期に書かれた *Mumtī' al-asmā' fī dhikr al-Jazūlī wa al-Tabbā' wa mā la-humā min al-atbā'* である。その著者はムハンマド・マフディー・ファースィー(Muḥammad al-Maḥdī al-Fāsī, d. 1109/1698)という人物で、その曾祖父アブー・マハースィン・ユースフ・ファースィー(Abū al-Maḥāsīn Yūsuf al-Fāsī, d. 1013/1605)が創始したファースィー教団のシャイフだった。このスーフィー教団はアラウィー朝と良好な関係を築き、教義上ではアフマド・ザッルークが創始したザッルーキー教団と密接な関係があった³¹⁾。伝記が書かれた時期がジャズーリーの死から2世紀を経ている点、上述の伝記がジャズーリーを讃える目的で書かれたとはいえ、ジャズーリー教団がかつて、アラウィー朝に滅ぼされたサアド朝(1524-1659)に助力していた点を考慮すると、記述内容には執筆時の政治状況が反映されている可能性が高い³²⁾。

3. 先行研究レビュー

3-1. ジャズーリーとジャズーリー教団について

ジャズーリーに触れている先行研究は、まずスーフィズムやスーフィー教団研究の概説書に見ることができる。ただし、そこではジャズーリーがモロッコにシャーズィー教団の支部を設けたスーフィーあるいは *Dalā'il al-khayrāt* の著者として紹介されており、対ポルトガルジハードの伝承に関してはそもそも言及がない場合も多い。そのため、ジャズーリーの思想や行動の独自性を評価していない上、ジャズーリーに影響を与えた要素をシャーズィー教団に限定しているという問題がある。1971年のJ. S. トリミングムによる *The Sufi Orders in Islam* ではジャズーリーは「タリーカもターイファも形成しなかった³³⁾」とされている。また2007年と比較的最近書かれたアブンナスル(Abun-Nasr)の *Muslim Communities of Grace: The Sufi Brotherhoods in Islamic Religious Life* においても、ジャズーリーはシャーズィー教団の支教団の創始者とみなされている。ここでは北アフリカ、西アフリカの教団における「ムハンマドの道」の教義の影響が語られるのは評価に値するが、その完成者であるガズワーニーについてまったく言及されていない点が問題点として挙げられる³⁴⁾。後述する個別研究の成果が概説書に反映されていないのが現状である。

30) Johannes Leo, *A Geographical Historie*, pp. 240-271.

31) Cornell, *Realm*, p. 159.

32) Cornell, *Realm*, pp. 158-160.

33) J. S. Trimingham, *The Sufi Orders in Islam*, Oxford, 1971; repr. Oxford & New York: Oxford University Press, 1998, p. 84.

34) Jamil M. Abun-Nasr, *Muslim Communities of Grace: The Sufi Brotherhoods in Islamic Religious Life*, New York: Columbia

マグリブにおけるスーフィズムと聖者崇敬を扱った研究には1989年のシャーズィリー（‘Abd al-Laṭīf al-Shādhilī）による *al-Taṣawwuf wa al-mujtama’*: *namādhij min al-qarn al-‘āshir al-Hijrī* があり、16世紀モロッコにおける聖者と聖者崇敬の実態を明らかにしている。その中でもジャズーリーの形成した集団はシャーズィリー教団の支教団として扱われている一方で、一次史料からジャズーリーヤの勢力範囲やスーフィーたちの出身地を割り出し、当時の社会における彼らの存在感を分析している点で興味深い³⁵⁾。

マグリブ史の研究書においてもやはりジャズーリーはシャーズィリー教団員として描かれている。モハメド・カブリーは1986年の著作で、マリーン朝期モロッコの政治権力・社会・宗教の関係を分析したが、モロッコ北部の「知的な」スーフィズムと南部の「不道徳な」スーフィズムという二元論から抜け出せていない。アブンナスルの1987年の著作はアラブ征服時代から20世紀の独立までのマグリブ史を概観したもののだが、ジャズーリーに関して一次史料を参照した形跡は見られない。

ジャズーリー及びジャズーリー教団の個別研究では、V. J. コーネルの一連のものがある。1992年の“Mystical Doctrine and Political Action in Moroccan Sufism: The Role of the Exemplar in the *Ṭarīqa al-Jazūliyya*”は、ジャズーリー教団の社会的・政治的行動主義の根拠となった模範 (*quḍwa*) の教義を作りあげた指導者たちの詳細な生涯を追い、モロッコにおける模範としてのスーフィー概念の発展を論じている。この模範とは、スーフィーの従うべき手本としてのシャイフの役割と、ムスリムがその言動を見習うべき預言者ムハンマド像と、ウンマの指導者という世俗的な役割を統合したもので、スーフィー・聖者による世俗社会の支配を正当化する理論である。ジャズーリーからサアド朝興隆に助力したガズワーニーまでを紹介しており、政治的存在としてのジャズーリー教団研究に重要である。1996年の“The ‘Sovereignty of the Imamate’ (Siyadat al-Imama) of the Jazuliyya-Ghazwaniyya: A Sufi Alternative to Sharifism?”は、ジャズーリーが原型を作り、ガズワーニーによって完成された、ジャズーリー教団における「イマームによる支配 (*siyāda al-imāma*)」の教義に焦点を当てている。ガズワーニーの教義におけるシーア派の影響を論じている点が興味深い。コーネルによれば、著作から窺えるジャズーリーの思想はスーフィーによる社会変革を促すものであり、生前の彼のジハードの根拠であったという。

上記の2論文や他項で紹介している論文の集大成が1998年の *Realm of the Saint: Power and Authority in Moroccan Sufism* である。ここではモロッコにおける聖者性の概念、すなわち神との概念的な「近さ」としての聖者性 (*sainthood*) であるワラーヤ (*walāya*) と世俗の権威としての聖者性であるウィラーヤ (*wilāya*) という主題がジャズーリー教団の教義を中心に論じられている。モロッコのスーフィズムと聖者崇敬の歴史を11世紀まで遡り、聖者伝、人名録、詩、ポルトガルの史書など広範な一次史料を援用して、モロッコ史と絡めたジャズーリー教団の教義が詳説されている。コーネルは、シャリーフの方が預言者との家族的近縁に基づいてジャズーリー教団のスーフィーより簡単にウィラーヤを得たために、最終的に神に守られた指導者としてジャズーリー教団のシャイフをしのぐに至ったと結論づけている。ガズワーニーは預言者性に関する教義を完成し、模範のスーフィーと世俗の指導者の一致を主張した一方で、自らシャリーフを名乗って権力に就こうとはしなかった。その点に謎が残るとともに、コーネルはモロッコにおけるシャリーフイイズムの

University Press, 2007, pp. 111–112, 131–132, 153.

35) ‘Abd al-Laṭīf al-Shādhilī, *al-Taṣawwuf wa al-mujtama’*: *namādhij min al-qarn al-‘āshir al-Hijrī*, Salé: University of Hassan II, 1989, pp. 152–163.

興隆を「早くとも15世紀以降である」と述べている³⁶⁾。その根拠として、コーネルは13世紀に書かれた聖者伝においてシャリーフであると言及された聖者がわずかであることを挙げている。しかし、N. J. G. カプテインによる中世マグリブの預言者生誕祭を扱った研究 *Muhammad's Birthday Festival: Early History in the Central Muslim Lands and Development in the Muslim West until the 10th/16th Century* によれば、13世紀後半からシャリーフは象徴的な権威によってマリーン朝の政治において存在感を発揮しており³⁷⁾、コーネルのシャリーフイズム理解には疑問が残る。シャリーフイズム研究に関しては次項でレビューを行う。

ジャズーリーの表象を扱ったものとしては、Y. フレンケルの“Muhammad al-Djazouli's Image in Biographical Dictionaries and Hagiographical Collections Written during the Sa'did Period in Morocco”がある。これはサアド朝期の人名辞典とマナーキブであるミクナスィーの *Durra al-hijāl fī asmā' al-Rijāl*、イブン・アスカルの *Dawḥa al-nāshir li-mahāsīn man kāna bi'l-Maghrib min mashāyikh al-qarn al-'āshir*、アフマド・バーバーの *Nayl al-ibtihāj bi-taṭrīz al-Dībāj* の3点におけるジャズーリーの表象の変遷を通じて、ジャズーリーへの崇敬と政治・社会状況の関係を分析している。この論文の主眼は歴史的事実よりも辞典執筆当時の社会分析に置かれている。しかし、ジャズーリーの死後最も早い時期に書かれたミクナスィーの人名辞典においては、ジャズーリーはウラマー・旅行者としてのみ描かれ、スーフィーあるいは社会的・政治的思想家としての記述が無かった³⁸⁾ という指摘はジャズーリーの実像を考える上で非常に重要である。ミクナスィーとアフマド・バーバーの著作は Cornell の *Realm of the Saint* に用いられていないため、*al-Djazouli's Image* と *Realm* を参照してジャズーリーの生涯を再検討する余地もある。ただし、ジャズーリーの著作内容を検討していない点は指摘しておく必要がある。

ジャズーリー及びジャズーリー教団に関する先行研究を概観したが、第2節で見たようにジャズーリーの著作は多数であるにも関わらず、その内容の検討がほとんどなされず後世のスーフィー・ウラマーの著作の研究に偏っていることがわかる。

3-2. マグリブにおけるシャリーフ崇敬について

先述したカプテインの *Muhammad's Birthday Festival* のほか、佐藤健太郎の“Sufi Celebrations of Muhammad's Birthday (al-Mawlid al-Nabawī) and the Ulama's View on It in al-Andalus and al-Maghrib, 1300–1400”がマグリブにおけるムハンマド崇敬・シャリーフ崇敬の始まりと受容に関する研究である³⁹⁾。15–16世紀のシャリーフイズム研究では、近年コリー (Stephen Cory) の一連の研究、“Breaking the Khaldunian Cycle? The Rise of Sharifianism as the Basis for Political Legitimacy in Early Modern Morocco,” “Sharīfian Rule in Morocco (10th–12th/16th–18th Centuries),” *Reviving the Islamic Caliphate in Early Modern Morocco*, “Honouring the Prophet's Family: A Comparison of the Approaches to Political Legitimacy of Abū'l-Ḥasan 'Alī al-Marīnī and Aḥmad al-Manṣūr al-Sa'dī”が出ている。

36) Cornell, *Realm*, p. 114.

37) Nico J. G. Kaptein, *Muhammad's Birthday Festival: Early History in the Central Muslim Lands and Development in the Muslim West until the 10th/16th Century*, Leiden & New York: Brill, 1993, pp. 97–123.

38) Y. Frenkel, “Muhammad al-Djazouli's Image in Biographical Dictionaries and Hagiographical Collections Written during the Sa'did Period in Morocco,” *Maghreb Review*, 18 (1993), i–ii, pp. 18–33.

39) Sato, Kentaro “Sufi Celebrations of Muhammad's Birthday (al-Mawlid al-Nabawī) and the Ulama's View on It in al-Andalus and al-Maghrib, 1300–1400,” *Sophia journal of Asian, African, and Middle Eastern studies*, 24 (2007), pp. 7–15.

3-3. 15-16世紀モロッコの社会状況について

対ポルトガル関係や、レコンキスタによってマグリブへ逃れてきたモリスコに関する研究が豊富である。コーネルによる1990年の“Socioeconomic Dimensions of Reconquista and Jihad in Morocco: Portuguese Dukkala and the Saʿdid Sus, 1450–1557”は世界システム論の周縁と考えられていたモロッコの大西洋岸地域が西ヨーロッパの経済成長に大きく寄与していたことを主張するものである。対キリスト教勢力ジハードに関しては、ヴェロンヌ(C. De La Véronne)の“Etat de l’artillerie et de la défense du Maroc après la chute de la dynastie berbère des Benī Waṭṭās (milieu du XVIe siècle)”が当時の戦いの様子を知る手がかりになる。

4. 今後の展望

本稿では主にジャズーリーと15-16世紀のジャズーリー教団を中心として史料状況と先行研究を概観した。そこから明らかになったのは、同時代史料の乏しさと、ジャズーリー自身の著作に関する研究の少なさである。さらにジャズーリーの生涯と思想に関しても、ジャズーリー自身がスーフィーによる社会変革を主張していたという説と、ジャズーリーには社会や政治の変革を志向する側面は無かったという説で研究者の見解が割れていることもわかった。まず、ジャズーリーの著作の内容から彼の思想を体系的に検討する必要がある。まだ精読には至っていないが、*‘Aqīda fī al-tawḥīd* と *‘Aqīda al-walī al-ṣāliḥ Sīdī Muḥammad ibn Sulaymān al-Jazūlī* はタイトルから神学書である可能性が高い⁴⁰⁾。スーフィーや祈祷書の著者として研究されているジャズーリーだが、その神学者としての側面が明らかになれば非常に興味深いと言える。同様にタイトルから、*Khiṣāl al-murādīn* は修行論、*Kitāb fī al-zuhd* と *al-Zuhd* は禁欲主義に関する書と考えられ、概括的にはスーフィズムのジャンルに入ると言える。ジャズーリーのスーフィズム思想はどのようなものだったのかを明らかにするのはもちろんのこと、神学書とスーフィズムの書、さらに *Dalāʾil al-Khayrāt* などの祈祷書の内容を相互参照する試みも行いたい。ジャズーリー教団が大衆の支持を集めた理由の一つと考えられ、ガズワーニーによって完成されたとされる、スーフィーによる政治活動を正当化するジャズーリー教団の思想と教義をジャズーリーにまで遡ることができるか否かということは、教団の形成過程を描き出す大きな鍵であると筆者は考えている。加えてガズワーニーに関しても、*Tahbīr al-ajrās fī sirr al-anfās* に関しては分析が十分進んでいないと見られる。内容を分析し、可能であれば著述時期を推定することによってジャズーリー教団シャイフたちの思想の変遷を辿りたい。

引用文献及び先行研究リスト

<日本語>

私市正年 2009『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拜』山川出版社。

篠田知暁 2015『ワッターズ朝期マグリブ・アクサーにおける国家と地域権力』京都大学博士論文。

40) ただし、神学の著作に擬装したスーフィズム文献である可能性や、神学思想とスーフィー思想を融合させた文献である可能性も十分考えられるため、今後の精読を必要とする。

< 外国語 >

- Abid, Hiba. 2014. "Un nouveau souffle mystique: al-Djazuli et le Dala'il al-Khayrat," *Le Maroc medieval: Un empire de l'Afrique à l'Espagne*, Paris: Hazan, pp. 551–553.
- Abun-Nasr, Jamil M. 1987. *A History of the Maghrib in the Islamic Period*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2007. *Muslim Communities of Grace: The Sufi Brotherhoods in Islamic Religious Life*. New York: Columbia University Press.
- Ben Cheneb, Mohammed. 2000 (1913). s.v. "al-DJAZŪLĪ," *EI² (The Encyclopedia of Islam, new ed.)* 10, Leiden: Brill.
- Cornell, V. J. 1983. "The Logic of Analogy and the Role of the Sufi Shaykh in Post-Marinid Morocco," *International Journal of Middle East Studies* 15(1), pp. 67–93.
- . 1990. "Socioeconomic Dimensions of Reconquista and Jihad in Morocco: Portuguese Dukkala and the Sa'did Sus, 1450–1557," *International Journal of Middle East Studies* 22(4), pp. 379–418.
- . 1992. "Mystical Doctrine and Political Action in Moroccan Sufism: The Role of the Exemplar in the Ṭarīqa al-Jazūliyya," *Al-Qanṭara: Revista de Estudios Árabes* 13(I) (1992), pp. 201–231.
- . 1996. "The 'Sovereignty of the Imamate' (Siyadat al-Imama) of the Jazuliyya-Ghazwaniyya: A Sufi Alternative to Sharifism?" *Al-Qanṭara: Revista de Estudios Árabes* 17(ii), pp. 429–451.
- . 1998. *Realm of the Saint: Power and Authority in Moroccan Sufism*, Austin: University of Texas Press.
- . 1999. "Faḳīh versus Faḳīr in Marinid Morocco: Epistemological Dimensions of a Polemic," *Islamic Mysticism Contested: Thirteen Centuries of Controversies and Polemics*, Leiden: Brill, pp. 207–224.
- Cory, Stephen. 2008. "Breaking the Khaldunian Cycle? The Rise of Sharifianism as the Basis for Political Legitimacy in Early Modern Morocco," *Journal of North African Studies* 13(iii), pp. 377–394.
- . 2010. "Sharīfian Rule in Morocco (10th–12th/16th–18th centuries)," *The New Cambridge History of Islam, vol. 2. The Western Islamic World: 11th to 18th Centuries*, pp. 453–479.
- . 2013. *Reviving the Islamic Caliphate in Early Modern Morocco*. Farnham: Ashgate.
- . 2014. "Honouring the Prophet's Family: a Comparison of the Approaches to Political Legitimacy of Abū'l-Hasan 'Alī al-Marīnī and Aḥmad al-Manṣūr al-Sa'dī," *The Articulation of Power in Medieval Iberia and the Maghrib*, pp. 107–124.
- Frenkel, Y. 1993. "Muhammad al-Djazouli's Image in Biographical Dictionaries and Hagiographical Collections Written during the Sa'did Period in Morocco," *Maghreb Review* 18(i–ii), pp. 18–33.
- Jazūlī, Muḥammad ibn Sulaymān. 1998. *Dalā'il al-khayrāt*, al-Dār al-Baydā': Maṭba'a al-Najāh al-Jadīda.
- Johannes Leo. 1969. *A Geographical Historie of Africa*, trans. by John Pory, New York: Da Capo Press.
- Kably, Mohammed. 1986. *Société, pouvoir et religion au Maroc à la fin du "Moyen-Age" (XIVe–XVe siècle)*, Paris: Maisonneuve et Larose.

- Kaptein, Nico J.G. 1993. *Muḥammad's Birthday Festival: Early History in the Central Muslim Lands and Development in the Muslim West until the 10th/16th Century*. Leiden; New York: Brill.
- Sato, Kentaro. 2007. "Sufi Celebrations of Muhammad's Birthday (al-Mawlid al-Nabawī) and the Ulama's View on It in al-Andalus and al-Maghrib, 1300–1400," *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies* 24, pp. 7–15.
- al-Shādhilī, ‘Abd al-Laṭīf. 1989. *al-Taṣawwuf wa al-Mujtama’*: *namādhij min al-qarn al-‘āshir al-Hijrī*. Salé: University of Hassan II.
- Trimingham, J. S. 1998(1971). *The Sufi Orders in Islam*. Oxford/New York: Oxford University Press.